

ひたちなか 埋文だより 64



はにわを運ぶ 2025 年は、国指定史跡の馬渡埴輪製作遺跡が最初に発掘調査されてから 60 周年でした。それに関連して、2025 年度の小中学生考古学体験講座「ふるさと考古学」19 では、馬渡埴輪製作遺跡を中心とした講座を実施しました。第 10 回目の「フィールド探検」では、講師の矢野徳也さんが、馬渡埴輪製作遺跡からそこで生産された埴輪が供給された市内阿字ヶ浦地区の川子塚古墳まで、当時埴輪が運ばれたように歩く講座を考えてくれました。講座当日は、矢野さん手作りの段ボールでできた円筒埴輪に棒を刺して、受講生が交代しながら無事に川子塚古墳まで運ぶことができました。これは 1500 年ぶりの古墳への埴輪供給(?)となりました。(2025.11.29)

CONTENTS	第22回企画展 古代の砥石の産地を探す		
	公開講座「ひたちなか市の考古学」第 18 回 奈良・平安時代研究の楽しみ		
	「私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—」 第 13 回 発掘三昧への道 県内編8 (瓦吹 堅)		
	川崎純徳先生追悼 さようなら、川崎純徳先生 (鈴木素行)		
	横穴墓を歩く³⁵ 長柄横穴群 (松本昌久)		
	ワンケース・ミュージアム 65 海を臨む石棺墓	のぞき見、展示室¹¹ スタンプ形石器	
歴史の小窓³⁴ 夜空と糸づくり	埋文センターの日々 2025 後期	ほか	

第22回企画展

古代の砥石の産地を探す

2026年2月13日(金)～5月13日(水)





展示のようす

日時
令和8年
2月13日[金] ▶ 5月13日[水]

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)
開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
入場無料
場所 ひたちなか市理蔵文化財調査センター
〒312-0011 茨城県ひたちなか市巾着 3499
☎ 029-276-8311

第22回企画展

古代の砥石の産地を探す

公益財団法人
ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

今回の展示は、二〇二六年二月一三日(金)から五月一三日(水)にかけて開催しました。ひたちなか市の調査では多くの砥石が出土しています。砥石を見ていくと似たような石が使われていることに気が付きます。砥石にする石は何でもよいわけではなく、鉄製品をうまく研ぐことができる石でした。そうした砥石はいったいどこで生産されて運ばれてきたのでしょうか。古代砥石の世界を産地の視点から紹介いたします。

砥石の種類について

砥石は粒子が荒いものから細かいものまであります。使い分けによって荒砥・中砥・仕上げ砥に分けられます。

荒砥は、刃こぼれが生じたときや、刃先の角度を変えたいときに使う粗い砥石で、砂岩が多く用いられています。

中砥は、荒研ぎをした刃物を研磨して刃の形を整える砥石です。水を十分に注ぎながら研ぎます。一般的に私たちが使っている砥石なので、近代まで各地に中砥を産出する山がありました。出土した砥石の多くが中砥です。

仕上げ砥は、さらに鋭利に研ぎあげるための粒子が緻密な砥石です。ひたちなか市の遺跡から仕上げ砥は出土していませんので、古代の生活ではそこまでの研ぎ上げは必要としなかったようです。

変成岩の砥石は日立市からやってきた!

ひたちなか市の遺跡から最も多く出土するのは変成岩の砥石です。岩石・鉱物に詳しい矢野徳也氏にみていただいたところ、日立市の鮎川層という地層に含まれている千枚岩や石英片岩といった岩石が使われていることがわかりました。鮎川層は神峰山より南方の日立市南東部に分布します。

千枚岩は黒味を帯びた暗青灰色の石で、千枚岩という名前の通り、薄く何枚にもはがれる性質があります。日立市諏訪梅林よりやや下流の、鮎川河床部に露頭があります。鮎川の転石にもみられますので、古代は川の石を拾って砥石に加工したのではないかと考えています。

石英片岩は淡緑色の石ですが、風化により褐色を増します。出土した石英片岩製砥石の多くは、褐色味があり鉱物が抜けた多数の小さい穴を持ちますので、風化していることがわかり



変成岩の砥石



日立市諏訪梅林の横を流れる鮎川の河床礫のようす。風化した石英片岩の転石が多く見られます。こうした石を拾って、砥石に加工していたのでしょう。



日立市西成沢町を流れる鮎川河床に露出する千枚岩の露頭。

変成岩製砥石の石材産地のようす



変成岩製砥石の石材採取地

ます。日立市南東部を流れる小河川には、このように風化した石英片岩の転石が多く見られます。おそらく古代ではこうした石を川から拾ってきて砥石に加工していたのでしょう。

川に転がっている石英片岩は褐色と青色があります。青色が多いです。日立の南東部を流れるほかの川でもそうでした。遺跡から出土した石英片岩の砥石は、青色のものも少しありますが、明褐色のものが多く見られます。風化して軟らかくなった明褐色の石英片岩が砥石には適していたため、選ばれている可能性があります。

鮎川層の分布は、古代常陸国久慈郡東部の助川郷・箕月郷にあたりますので、それら二つの郷が産地であったといえます。

ひたちなか市からは古墳時代前期にさかのぼる変成岩製砥石も出土していますので、久慈郡東部は古くから砥石の産地として知られていたようです。

奈良時代に入り鉄製品が普及すると砥石の需要が増大し、助川郷や箕月郷から茨城北半部の各地へ多くの砥石が流通していったのです。

箕月郷の南に隣接する高市郷は、郷名から

市が開かれていた場所と考えられています（志田一九九四）。そこは久慈川の河口部に近く、駅路が通っています。砥石の石材が採れる場所が流通の便に恵まれた市場に隣接していたため、長期間砥石生産を続けることができたのではないのでしょうか。

流紋岩の砥石は栃木県方面からやってきた？

ひたちなか市の遺跡から出土する流紋岩製砥石は、一九九九年に検討した際には、常陸大宮市諸沢川河床

礫で採取できる凝灰岩ではないかと考えました（佐々木二〇〇〇）が、二〇一一年に佐倉市史編さんに伴う柴田徹氏の分析によって、産地不明の流紋岩であることが明らかとなりました（内田二〇一四）。

この流紋岩の砥石は、やや黄色味を帯びた白色で、比重が二・二前後です。混じり物も少なく、砥石に適した軟らかさの石です。有名な砥石の産地である群馬県南牧村砥沢産の流紋岩製砥石によく似ていますが、砥沢産は比重が二・四五前後で方解石を含んでいる点が異なります。

流紋岩製砥石の石材は、茨城県内に産地が見当たらないため、栃木県かもしれないと思い、栃木県埋蔵文化財センターで栃木県内出土の奈良・平安時代の砥石をみせていただきました。すると、栃木県内各地からよく似た砥石が多数出土していることがわかりました。群馬県や埼玉県から出土した砥石をみせていただいた際には、砥沢産と思われる砥石が多かったので、ひ



流紋岩の砥石

たちなか市から出土する流紋岩製砥石の産地は、栃木県内にあるのではないかと予想しています。

流紋岩製砥石の産地を探して

そこでインターネットの「地質図ナビ」で栃木県の流紋岩地帯を確認したところ、宇都宮市以北の栃木県北部に分布することがわかりました。そこで二〇一四年秋頃から、その地域の踏査を始めました。流紋岩製砥石も変成岩製砥石と同じように小河川の河床礫を利用してはならないかと考えたため、河床礫として大量に拾える川がないか探しました。

まずは那須塩原市あたりから南にむけて河床礫を見ていきましたが見つかりませんでした。二〇一九年からは、宇都宮市から日光市にかけて広がる流紋岩地帯で、可能性が高そうなところをあちこち見ていきました。しかし残念ながらいまのところ産地に結びつく資料は得られていない状況です。

砥石と同じ流紋岩が河床礫としてゴロゴロと落ちている場所が必ずあると思っていますが、なかなか姿を現してはくれません。いったいどこにそうした「宝の山」は眠っているのでしょうか。もうすこし探ってみたいと思っています。

砥石の流通研究へ

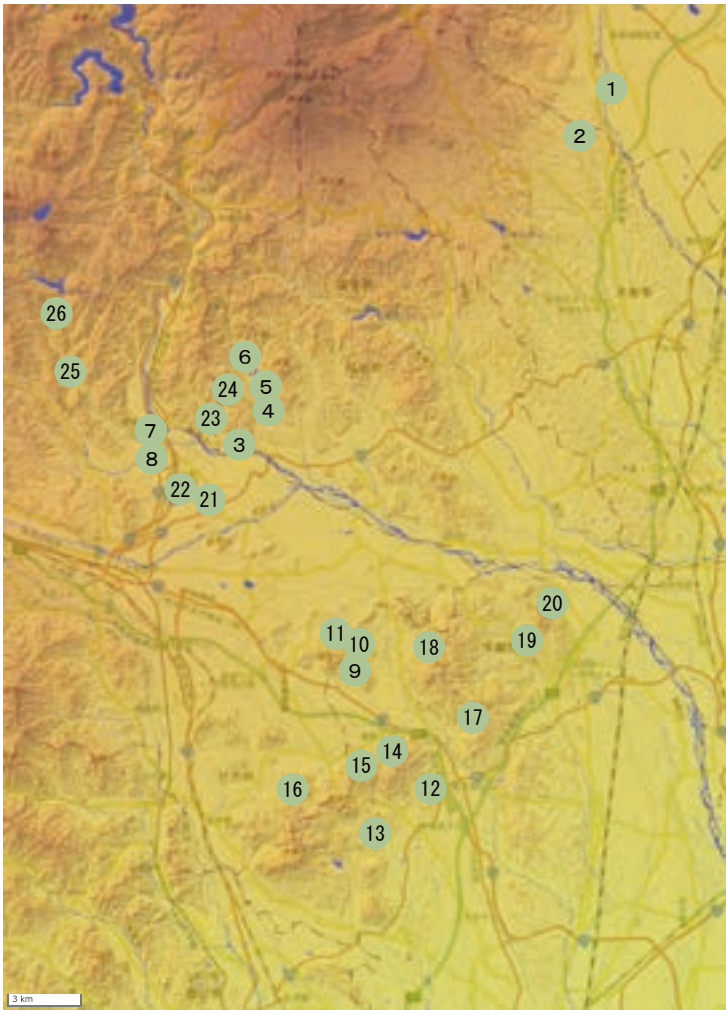
栃木県産ではないかと推定される流紋岩製砥石は、栃木県から茨城県、そして千葉県へと至る広い範囲に流通しているようです。こうした広域に流通する砥石以外にも、日立市産の変成岩製砥石のように茨城県北半部を中心に流通す

る砥石や、日立市久慈産の酸性凝灰岩製砥石や城里町産の珪質頁岩製砥石のように出土がごく少ない砥石もあります。また、今回の展示に際して再検討した結果、荒砥である砂岩の産地が近隣地域ではない可能性も出てきました。

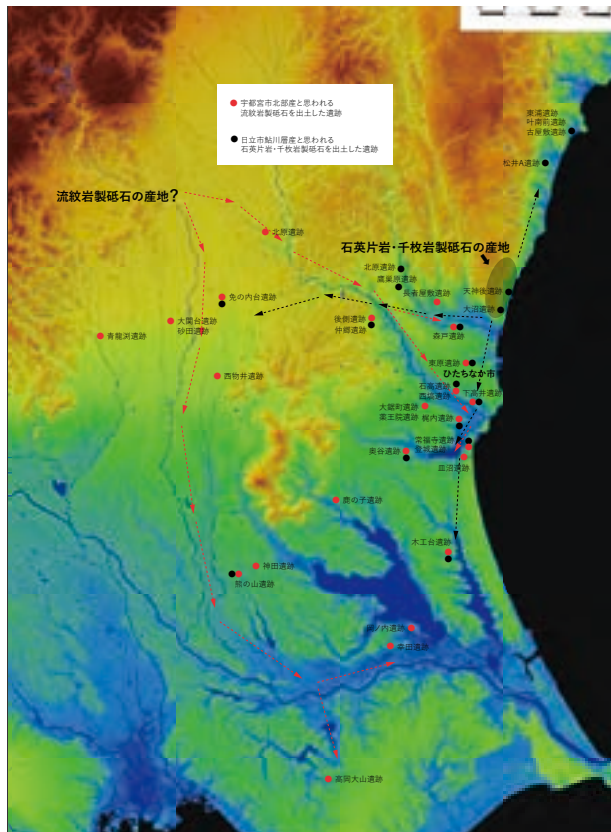
今後は、出土砥石の岩石学的観察がひたちなか市以外の地域でも実施されて、集積したデータを比較していくことで、古代砥石の流通研究が深まっていくことを期待したいと思います。

参考文献 松永ゆかこ一九九三『江戸東京大工道具職人』、志田諄一九九四『久慈郡と多珂郡の郷里』、『新修日立市史上巻』、佐々木義則二〇〇〇『岩質・形態からみた武田石高遺跡出土砥石の特徴』、『武田石高遺跡奈良・平安時代編』、内田理彦二〇一四『佐倉市史』、『考古編における「分析と集成」について』、『佐倉市史研究』、佐々木義則二〇一五『ワンケース・ミュージアム三四日立からきた砥石』、『ひたちなか埋文だより』第四二号

なお今回の企画展の開催に際し、群馬県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、栃木県埋蔵文化財センター、佐倉市教育委員会には、資料の見学等でお世話になりました。また矢野徳也氏には石材観察をお願いするなど大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。



流紋岩製砥石石材の探索地点（地理院地図 Vector を使用）



砥石の流通経路の想像（地理院地図 Vector を使用）



地点1 碓川の河床礫



地点3 鬼怒川の河床礫



地点4 白石川の河床礫



地点4 白石川の凝灰岩露頭



地点5 白石川の河床礫



地点6 白石川上流の河床礫と露頭



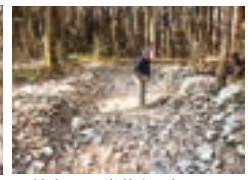
地点9 寅巳山麓の土石流跡



地点11 寅巳川の河床礫



地点12 男抱山の山頂



地点14 半蔵山西部の小河川の河床礫



地点17 黒戸山付近の小河川の河床礫



地点18 本山付近の小河川の河床礫



地点19 羽黒山西部の砂利採掘場



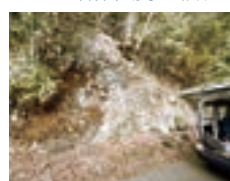
地点20 羽黒山東部の露頭



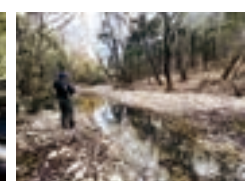
地点21 富士山の岩谷不動尊の露頭



地点22 刈場山の岩谷稲荷の露頭



地点23 高徳の軌道跡切通しの露頭



地点24 高徳のオソ沢川の河床礫

公開講座「ひたちなか市の考古学」第一八回 奈良・平安時代研究の楽しみ

二〇二六年二月十五日から三月八日の毎週日曜日に、公開講座「ひたちなか市の考古学」第一八回 奈良・平安時代研究の楽しみ」を開催しました。三名の研究者をお招きし、奈良・平安時代に関する御研究についてお話しいただきました。講座は、様々な視点にたつ奈良・平安時代研究の内容で、楽しくて深い内容となりました。



月/日	演 題	講 師
2/15 (日)	古代の席・薦生産について	日本考古学協会員 津野 仁 氏
2/22 (日)	岩石・鉱物と考古学	筑波山地域ジオパーク教育・学術部会副部長 矢野 徳也 氏
3/1 (日)	万葉集と筑波山	郷土史家 井坂 敦実 氏
3/8 (日)	ひたちなか市出土砥石の産地を探る	ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 佐々木 義則



郷土史家
井坂 敦実 氏

「この「さ百合の花の夜床」の歌を作ったのは、那珂郡の上丁大舎人部千文という人。そして三反田下高井遺跡からは、大舎人小文という墨書土器が出てきた。今回初めて下高井遺跡に行ってみたくて、筑波山が見える。歌の作者である大舎人部千文は、この遺跡の出身かもしれない。感動的ですわね。」



学術部会副部長
矢野 徳也 氏

「石鏡の近くに「あおに」という青緑色の顔料を産すると『常陸国風土記』にあります。そんなものあるのかなと思ったんですが、石鏡近くの崖に青緑色の層がありました。この正体は火山角礫岩という火山岩の破片を大量に含む堆積岩です。この青い石を砕くと同じ色の粉ができる。素直に風土記の通りに探すと見つかったので驚きました。」



日本考古学協会員
津野 仁 氏

「竪穴住居は概して周辺が柔らかくて真ん中が硬い。真ん中が土間で周りに敷物を敷いていた可能性があります。柔らかい部分の幅は1mから1m 50cm位です。席の幅は三尺六寸で108cm、だいたいこの規格なので、住居の柔らかい部分の幅が合ってくるんですね。」

歴史の小窓 その三四

夜空と糸づくり



これは下高井遺跡から出土した石製紡錘車上面の模様をスマホで撮って、それを「光拓本」というアプリを使って陰影をつけた写真にし、

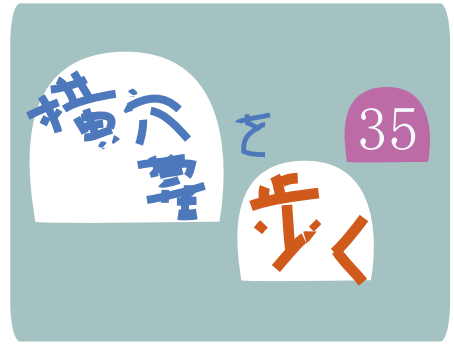
その写真を「グーグルAI「Gemini」に「実測図のようにして」とお願いしてできあがった「絵」です。遊びで作った「絵」ですが、実物ではよく見えない円文や刻線が、あつという間に浮き出てきて驚きました。

この紡錘車は、埋文たより五六号一五ページでは、出土した住居の年代である九世紀に位置づけましたが、紡錘車の形状から見ると古墳時代後期のものかもしれません。

私はこの円文が星に見えるのですが、先日、大分県の研究者の方に、大分市飛山横穴墓から玄武図（天文図？）が描かれた石製紡錘車出土していることを教えていただきました。

円文といえば、下高井遺跡の谷向こうには円文の壁画をもつ虎塚古墳があります。星が描かれた特別な紡錘車で擦った糸を用いて織られた布は、虎塚古墳と関係するのでしょうか。謎は深まるばかりです。

（佐々木義則）



千葉県長生郡長柄町
ながら
長柄横穴群

松本 昌久
 (長柄町教育委員会)

千葉県の房総半島には、約四六〇〇基の横穴墓が確認されていますが、その総数は五〇〇〇基ほどになると思われ、全国でも分布が多い地域になります。中でも、史跡長柄横穴群が存在する長生地域では約一三〇〇基を超える横穴墓が存在し、集中して分布している場所となります。特にこの地域の横穴墓は、「高壇式」と呼ばれる、玄室全体が羨道より約一・五m高く造られている横穴墓が主流で、他に例のないことで知られています。

史跡長柄横穴群は、昭和三十三年（一九五八）の高橋光男氏による「東上総源六谷横穴群」、昭和五二年（一九七七）の斎藤忠氏による「長柄横穴群」等で報告がされた後、昭和五五年（一九八〇）には一六基が「長柄横穴群徳増支群」として千葉県の指定史跡となりました。

その後、平成五年（一九九三）に千葉県教育委員会が、県内重要遺跡確認調査を実施し、当地域

の横穴墓の特徴が良好に残っていることから、平成七年（一九九五）に三五基の横穴墓が国の史跡として指定されています。なお、平成八年に第二支群で一基の横穴墓が新たに発見されています。

史跡長柄横穴群の概要は、南北に広がる谷の東側丘陵に第一支群二一基、西側丘陵に第二支群一五基の横穴墓が存在しています。第一支群は、四小支群、第二支群は、四から五小支群に分かれて造られています。横穴墓はすべて高壇式形態であり、玄室内部は冢形・ドーム形・縦アーチ形等の形をしています。また多くの横穴墓の羨道及び玄室内部には、白色漆喰が塗られていたと考えられており、線刻画も確認されています。特に第一三号墓には、人物・鳥・建物等の線刻画が集中して確認されました。出土遺物は、須恵器・土師器・鉄製品等が出土しています。

長柄町では、史跡指定後に国及び県の補助を受け、平成八年度に考古学等の専門委員を委嘱し、史跡長柄横穴群の保存整備の基本方針を計画し、第一支群について保存整備を進めることとなりました。平成九・十年には、指定地の公有化、平成一一年度に周辺地域の測量、その後、保存整備基本設計の策定、発掘調査及

び地質調査を行って、平成一五年度より保存整備を進め、平成二二年度の史跡長柄横穴群資料館開館により保存整備が終了となりました。資料館では、史跡長柄横穴群周辺の横穴墓の発掘調査で出土した土器、第一三号墓玄室の実物大模型等を展示しています。

また、平成二九年度から、「長柄町デジタルアーカイブ」としてインターネット公開を行っており、保存のため未公開となっている横穴墓の内部、線刻画の詳細画像等を見ることが出来ます。

現地は自由に見学することが出来ますので、全国でも珍しい高壇式という形態で、大型の横穴墓をご覧ください。（資料館は職員が常駐しておりませんので、事前にご連絡いただくか、入口のインターホンを押していただければ職員が対応に向かいます。）



写真1 長柄横穴群第一支群第二小支群



写真2 長柄横穴群の「高壇式」



長柄町デジタルアーカイブ

さようなら、川崎純徳先生

鈴木素行

川崎純徳先生が二〇二五（令和七）年五月四日に息を引き取られたと知らせがあった。葬儀は家族葬で、既に埋葬までが済んでいるという。三月二八日に入院先を見舞い、その衰弱のご様子から、先生に残された命の時間が長くないことは覚悟しなければならなかった。とは言え、実際にその日が来てみると、寂寥の大きさを覚えることなどできなかつた。お別れをする機会がないままとなつたので、六月一日、水戸保和苑ほわえん近くの墓地に埋葬されたということだけを頼りに訪ねてみた。当日は「あじさい祭り」の最中で、入口付近の信号で停止すると、有料駐車場の順番待ちをする長い車列が見えた。信号が変わりその最後尾に付くため左折しようとする、正面で手招きをしている。満車だった無料駐車場にちょうど一台分の空ができたのだ。墓地は常磐共有墓地という名称で、「水戸黄門 格さんの墓」もあり、敷地は広大であった。端から一つ一つの墓碑を確認していったわけではない。何となくとしか言いようがないのだが、結果的に最短の距離を歩いて先生のお墓に辿り着いていた。これも駐車場も、彼岸の先生にまた面倒を見ていただいたような心持がしている。墓誌に追刻された先生は「川崎純徳」の文字で、姓が戸籍上は「川崎」であることを知った。「当用漢字」の廃止に伴い多くが戸籍の表記を使用するように

なつたが、考古学の「純徳」は、生涯「川崎」であった。「崎」か「崎」かなど、そんなことには全くこだわらない先生のお人柄も偲ばれるのだった。先生には半世紀になろうかというお付き合いをいただいたが、ここには、その初期の一九八〇年代を中心に書き留めてみた。先生と私はちょうど二〇歳の違いであるから、先生が四十代、私が二十代の頃のことである。

大学二年次を迎える一九七九（昭和五四）年の春休みに、水戸銀杏坂の古書店で先生の著書『原始古代の茨城』（一九七五年、海峡の念）を買った。平易な文章で綴られていて、これは一気に読むことができた。その年の夏休みから勝田市（現・ひたちなか市）の発掘調査に参加することになるのだが、先生をお見かけしたのは、八月の君ヶ台貝塚ではなく、冬休み一二月の三反田蜆塚貝塚かきがだいではなかったか。茨城県歴史館の川上博義さんと共に現場に来られた。お話ができたのは、整理作業に参加した次の春休みであった。先生は、B5判横書きの原稿用紙と万年筆をいつも携帯されて、どこでも原稿を書いていた。風邪気味であつたらしく、原稿用紙で鼻をかむ人を私は初めて目撃することになった。当時の文化財資料室では、夕方五時を過ぎると毎日のように酒宴となり、来訪された先輩方のお話を伺うことができた。先生とは、帰路

の水戸駅まで一駅分の短い時間ではあつたが、車中もご一緒させていただいていた。

大学院に進学していた一九八三（昭和五八）年の三月、先生からの手紙が東京の下宿に届いた。先生の便箋は、いつもは原稿用紙のだが、この時はコピーが二枚同封されていて、それは、『茨城の縄文式土器』という書籍の出版計画と執筆分担であつた。川上博義さんと連名の依頼文には次のように書かれている。「前々から茨城の埋蔵文化財保存運動の一つとして県民向けの平易な入門書の刊行を計画していましたが今回思い切つて実行に移すことになりました。今回は『茨城の縄文式土器』としましたが、このシリーズでつぎつぎと刊行を考えています。その第一冊である『茨城の縄文式土器』は何とか成功させたいと思つています。このような啓蒙的な活動を通して保存運動の幅をひろげ、またしっかりしたものにしていかなければならないと思つています。是非、ご協力いただきたくお願いする次第です」。先生の著書『原始古代の茨城』は、「これから考古学を学ぶ人のために」が最終章で、「いざ折をみて、非常に特色ある発達を示した縄文、弥生、土師時代の遺跡や遺物についての分りやすい解説書や研究の手引のようなものを作つてみたいと考えている」と結ばれていた。これを実現しようという企画で



川崎純徳先生 1938年水戸市生まれ。明治大学文学部史学地理学科卒。ひたちなか市では、馬渡埴輪製作遺跡や虎塚古墳、十五郎穴横穴群などを調査され、ひたちなか市文化財保護審議会会長やひたちなか市史跡保存対策委員会副委員長を務められた。2025年逝去（享年88歳）。

*写真は2015年撮影

あったことがわかる。執筆を割り振られた縄文時代早期後葉から前期前葉の諸型式については、県内の資料を集成し、守谷町（現・守谷市）郷州原遺跡の再実測や日立市速下遺跡に「速下式」を設定するなど準備を進めたが、この企画は頓挫することになったらしい。後年に、那珂町史編さん事業の一環として土器型式を解説した『那珂町の考古学』が刊行されるのは、『茨城の縄文式土器』が幻となったことによるのである。

やはりこの頃のことであったと思う。杉原荘介先生の古稀祝賀のために企画された論集の原稿を大学まで届けるよう先生から依頼された。論集は、杉原先生が急逝されたことで、追悼の『論集 日本原史』（一九八五年、吉川弘文館）として刊行され

先生自身が最近に設定されたばかりなのだ。このような研究者を私は他に知らない。後年にも、「泉坂下」遺跡をしばらくは「泉坂上」と呼んでいた。「上」か「下」かなど、そんなことを気にもしないのが先生なのであった。

大学院に在籍できるのも最終年の一九八五（昭和六〇）年、五月の日本考古学協会に行くと、会場で川又清明さんに話しかけられた。「夏に大串貝塚を掘るんだってね。川崎先生がソコウくんと呼ぶって言ってたよ」。全くの初耳であった。修士論文の提出に暗雲が漂う中、八月には常澄村（現・水戸市）で調査が始まるのだった。ただ、直前に吹野富美夫さんから調査に参加したいと連絡があり、「飛んで火に入る夏の虫」が実在するこ

ることになった。先生はこれに、「中丸川水系における弥生文化の軌跡」を執筆されていたのである。刊行後に読んでみると、論文中の「上・稲吉式」が全て「下・稲吉式」になっていくことに驚いた。「上・稲吉式」は、弥生時代茨城県南部の土器型式で、

とを私は知った。先生は公務の合間を縫いながら、毎日のように現場に通われ、畑の真ん中でジャージに着替えていた。調査後、遺物の実測は全て自身が担当するよう吹野さんに厳命して論文に取り掛かったが、しばらくすると電話がきた。「川崎先生が石鏃の実測を始めてしまいました」。とにかく先生は、土器の接合も遺物の作図も大好きだった。内面を観察し断面を作図しながら接合を進めようと土器の破片を広げておけば、いつの間にか接合されてしまうことになる。作図はやたらと速いのだが、浄書のトレース図であっても線が離れていようが飛び出していようが一向に構わないのだ。吹野さんには、「土器と礫石器だけは死守するように」と伝えて電話を切った。

大学院を修了した一九八六（昭和六二）年は、武田遺跡群調査会で遺跡の発掘調査と報告書作成に従事した。これが、勝田市に計画されていた埋蔵文化財調査機関の前身となるはずであったが、折からの円安の影響で、次年度の調査もろとも立ち消えとなった。年度末で、場所は居酒屋「ふくじめ」であった。市立博物館の検討委員会で会議を終えた先生と合流した。先生は、「博物館の建設費を削っても鈴木を採用すべきだと言ったのだが、駄目だった」と済まなそうに言う。酒の場に用意された慰めでなく、会議でも本当にそのようなことを発言してしまおう人であった。「（人間）至る処青山有りだ」。その言葉で、私は美浦村の陸平貝塚に向うことになるのである。



調査された遺跡の位置

⇒ 新平遺跡第2次調査で確認された集石遺構



⇒ 向坪遺跡第13次調査第1B号住居跡の遺物出土状況



二〇二五年度の市内遺跡は、試掘調査32件、本調査1件の、あわせて33件の調査が実施されました。

試掘調査では、新平遺跡第2次調査で、縄文時代早期と考えられる住居跡が2基確認され、田戸下層式の土器が多数出土しました。また、住居跡の近くからは、用途不明の焼けた石の集石遺構も確認されました。磯合古墳群第11次調査では、新たに古墳1基の周溝が確認されました。市毛下坪遺跡第27次調査では、確認された住居跡4基のうちの2基が奈良・平安時代の住居跡で、遺構からは刀子が1点出土しています。本調査の向坪遺跡第13次調査では、古墳時代の住居跡3基と溝跡1条、土坑1基、ピット9

基が確認されました。1A・B号住居跡は重なって検出され、1B号住居跡が廃絶した後、その上に1A号住居跡がつけられたことが判っています。また、1B号住居跡は、床面に焼土や炭化材が広がっており、焼失していることが確認されました。1A号住居跡からは、投げ込まれたような様子の多量の土器が確認され、石製模造品が複数確認されています。1B号住居跡では、脚部から下が残存する2点の高坏が、潰れた状態で出土し、その他に甕形土器や白色粘土の塊なども確認されました。2号住居跡は、ほとんどが調査区外のため一部しか調査できていませんが、覆土から土製の紡錘車が確認されています。(田中美零)



第11回で紹介する遺物は、不思議な形のスタンプリング石器です。

この石器は河原石などの棒状や楕円形をした石を半分に割り、両側縁を抉るように加工し持ち手の様にした敲石の一種です。縄文時代草創期後半の燃糸文土器に伴って出土する特徴的な石器として知られています。半割した部分が底面で、その形状がスタンプリングに似ていることから名前が付けられました。この中で、底面が三角形になり、三角錐のような形になるものは三角錐形石器とも呼ばれます。底面の平坦な部分を機能面として使用したと考えられています。出土地物にあまり摩耗した痕跡がなく、柔らかい植物質のものを磨り潰す、敲きほぐすなどに利用したと推定されていますが、詳細は不明です。

展示されている資料は、那珂市にある草創期の遺物が出土する山王原遺跡で、個人の方が採集し寄託されたものです。那珂市では他に中台津田遺跡でも多く採集され、この遺跡の南に広がるひたちなか市の黒袴遺跡でも、スタンプリング形石器が出土しています。(田中美零)



2025（令和7）年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	回数	所在地	種別	時期	遺構・遺物
1	じぞうね 地藏根遺跡	11 次	勝倉	試掘	4 月	住居跡 4 基(奈良・平安 3, 時期不明 1), 溝跡 4 条(時期不明), 土坑 2 基(時期不明, ビット 6 基(時期不明)を確認。土師器, 須恵器, 鉄滓が出土。
2	みなみしゅくご 南宿後遺跡	1 次	長砂	試掘	4 月	なし。
3	ひがしはら 東原遺跡	14 次	高野	試掘	4 月	なし。
4	いちげしもつば 市毛下坪遺跡	27 次	市毛	試掘	4 月	住居跡 4 基(奈良・平安 2, 時期不明 2), ビット 9 基を確認。土師器, 刀子が出土。
5	むかいづば 向坪遺跡	11 次	堀口	試掘	5 月	住居跡 2 基(古墳 1, 平安 1,)溝跡 1 条を確認。土師器, 須恵器が出土。
6	にいだいら 新平遺跡	2 次	三反田	試掘	5 月	住居跡 3 基(縄文 2, 時期不明 1), 土坑 2 基(縄文 1, 時期不明 1), 集石遺構 1 基を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 礫が出土。
7	おいのづか 老ノ塚遺跡 おいのづか古墳群 老ノ塚古墳群	4 次 4 次	稲田	試掘	5 月	なし。
8	いそあいでふんぐん 磯合古墳群	11 次	磯崎	試掘	5 月	古墳周溝 1 条, 溝跡 1 条を確認。出土遺物なし。
9	たみやほらいち 田宮原 I 遺跡	3 次	田宮原	試掘	5 月	土坑 1 基, ビット 1 基を確認。出土遺物なし。
10	みたんだしんぼり 三反田新堀遺跡	21 次	三反田	試掘	5 月	なし。
11	みねのやま 峯ノ山遺跡	1 次	国神前	試掘	6 月	なし。
12	いちげかもつば 市毛上坪遺跡	41 次	市毛	試掘	6 月	住居跡 12 基(弥生 1, 古墳 7, 平安 1 時期不明 3), 溝跡 1 条(中世), ビット 1 基を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器が出土。
13	ほりぐち 堀口遺跡	42 次	堀口	試掘	6 月	住居跡 7 基(古墳 5, 奈良・平安 1, 時期不明 1), ビット 3 基を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器が出土。
14	おいのづか 老ノ塚遺跡 おいのづか古墳群 老ノ塚古墳群	5 次 5 次	稲田	試掘	7 月	なし。
15	むかいづば 向坪遺跡	12 次	堀口	試掘	7 月	なし。
16	いちげしもつば 市毛下坪遺跡	28 次	市毛	試掘	7 月	住居跡 2 基(古墳～平安 1, 時期不明 1), 溝跡 2 条, 土坑 3 基, ビット 1 基を確認。土師器が出土。
17	いちげかもつば 市毛上坪遺跡	42 次	市毛	試掘	7 月	住居跡 11 基(古墳 3 基, 奈良・平安 1, 時期不明 7 基), 溝跡 3 条, 土坑 2 基(近世 1, 時期不明 1), ビット 3 基を確認。土師器, 須恵器, 近世土器が出土。
18	むかいづば 向坪遺跡	13 次	堀口	本調査	7 月	住居跡 3 基(古墳), 溝跡 1 条, 土坑 1 基, ビット 9 基を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 石製模造品, 白玉, 土製紡錘車, 鉄製品が出土。
19	ひがしはら 東原遺跡	15 次	高野	試掘	8 月	なし。
20	こうやふじやま 高野富士山遺跡	22 次	高野	試掘	8 月	住居跡 1 基(時期不明), 溝跡 1 条, ビット 1 基を確認。出土遺物なし。
21	たみやほらいち 田宮原 I 遺跡	4 次	田宮原	試掘	8 月	ビット 1 基を確認。弥生土器, 土師器が出土。
22	くろぼかま 黒袴遺跡	10 次	津田	試掘	8 月	なし。
23	しばた 柴田遺跡	11 次	中根	試掘	11 月	土坑 2 基(縄文 1, 時期不明 1), ビット 9 基, 炉跡 1 基を確認。縄文土器が出土。
24	いちげかもつば 市毛上坪遺跡	43 次	市毛	試掘	9 月	住居跡 1 基(平安), 溝跡 1 条, ビット 4 基を確認。土師器, 須恵器が出土。
25	はたけのはら 畠ノ原遺跡	5 次	金上	試掘	9 月	住居跡 1 基(奈良), 溝跡 1 条, 土坑 2 基, ビット 2 基を確認。土師器, 須恵器が出土。
26	まりやまこふんぐん 前山古墳群	1 次	阿字ヶ浦	試掘	10 月	なし。
27	じぞうね 地藏根遺跡	12 次	勝倉	試掘	10 月	住居跡 2 基(奈良・平安 1, 時期不明 1), 溝跡 1 条を確認。土師器, 須恵器が出土。
28	うちで 内手遺跡	5 次	三反田	試掘	10 月	土坑 1 基(時期不明)を確認。出土遺物なし。
29	たみやほらいち 田宮原 I 遺跡	5 次	田宮原	試掘	12 月	なし。
30	しもたかば 下高場遺跡	3 次	高場	試掘	1 月	溝跡 1 条, 土坑 4 基, ビット 6 基を確認。縄文土器, 土師器, 瓦質土器が出土。
31	おいのづか古墳群 老ノ塚古墳群	6 次	稲田	試掘	2 月	なし。
32	おかだ 岡田遺跡	40 次	三反田	試掘	3 月	住居跡 17 基(弥生 2, 古墳 2, 平安 5, 時期不明 8), 溝跡 2 条, 土坑 2 基, ビット 1 基を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器が出土。
33	むかいづば 向坪遺跡	14 次	堀口	試掘	3 月	住居跡 1 基(時期不明), 溝跡 1 条, 土坑 3 基を確認。土師器, 須恵器が出土。

大正一一年に国の指定となった水戸市吉田古墳は、奥壁に靴・刀子・銚などの武具類の線刻壁画を有した横穴式石室をもつ。昭和四七年頃まで石室に自由に出入りでき、壁画面への落書も複数所みつかった。そんな中、昭和四七年四月二八日から五月八日の間、水戸市教育委員会の伊東重敏さんを主任に環境整備に関する情報を得るため調査が実施された。発掘には國學院大學や茨城大学考古学研究会の会員等が参加し、古墳の西側に周溝を確認するためのトレンチを四か所、石室から南へ一か所設置して古墳の規模や形状、さらに羨道部の状況などの調査を進め、石室内に落下状態の天井石一個も元の状態に修復した。そのほか、石室の形状や壁画の実測、そして採拓なども実施。今回の調査の結果、トレンチで確認できた周溝の状況から墳形は方墳ではないが円墳としては疑問残る結果となった。参加者の宿舎は吉田ヘルセンター(?)で、宿舎から吉田古墳までは薬王院の境内を抜けて明利酒造の門の前を通って歩いた。古墳の西側には空家があり、庭先には野蒜がたくさん生えており、掘り起こして夕飯時の酒のつまみにした。

奥壁壁画の採拓は満足できる出来ではなかったが、一枚研究用に伊東さんの許可をもらって入手した。それを昭和六〇年頃に表具して水戸市立博物館に寄託していたが、担当者から不要のために返却するといわれ、茨城県立歴史館に寄贈した。

石室内の作業が終了した五月六日土曜日、午

私的茨城考古学外史一遺跡・人 出会いと別れ一

第13回 発掘三昧への道 県内編8

水戸市吉田古墳・赤塚西団地古墳群(二次)・取手市二本松遺跡



吉田古墳調査参加者



瓦吹 堅

後一時から市民に向けて一般公開した。この日には木村市長をはじめ県文化財担当の大森信英・西宮一男先生のほか、県内外の研究者も参加し、当日の参加人数は四〇〇人を超えた。その後、吉田古墳は数次にわたり調査され、墳形は八角形であることが判明した。

同じ年の六月中旬、伊東さんから取手市の調査に参加してほしいと連絡があり、七月一日から九日までの期間、個人住宅建設に伴う台宿二本松遺跡の調査に参加した。伊東さんは取手市からの派遣申請で指揮を執り、取手市では寺田市会議員はじめ社会教育課職員一同が全面的にバックアップしてくれた。宿舎は利根川べりの福祉センターで、遺跡までは県立取手二高の前を通って歩いて往復した。

個人住宅建設予定地内には縄文時代中期と平安時代の住居跡それぞれ一軒が検出されて調査した。7日には福祉センター脇の利根川河川敷で花火大会が開催され、我々は顔を真上に向けて強烈な炸裂音と空を彩る花火を楽しんだ。調査参加者は、國學院大学の山下房子・小木香・北村誠・高田正利・田宮一典・橋本勉・吉野勢津子・藤井裕紀枝で、調査中諸星政得先生や茨城大学茂木雅博先生が激励に遺跡までお出かけた。その後、調査に参加していた田宮君は卒業後に取手市教育委員会に勤務して文化財を担当し、結婚と共に両親を伴って水戸市から取手市に一家で転居した。また静岡県出身の小木君は、卒業

後に浜松市職員となって浜松市博物館や楽器博物館に勤務したが、退職後の令和四年一〇月八日鬼籍に入られた。

台宿二本松遺跡の調査が終了した翌日、我々は水戸市赤塚古墳群（当時は赤塚西団地古墳群）の二次調査に参加するため移動し、赤塚駅近くの角屋旅館に入った。前年度は東支群の前方後円墳などが調査されて一部が保存地区となり、今回は西支群の古墳群や方形周溝墓群が調査対象。調査には取手から移動した我々のほか、茨城大学考古学研究会会員の参加も得て行われた。西側の水田に面した円墳（一〇号墳）では、墳頂部に長さ三mほどの埋葬施設があり、内部から土師器坏が二〇

点、周溝の南東ブリッジから須恵器坏が出土。さらに墳丘部からは一部が朱彩された円筒埴輪も出土した。方形周溝墓群では、盛土がある一辺一〇m以上の周溝墓を五基以上調査したが、埋葬施設を検出することはできなかった。各周溝墓の周溝内からは、古式土師器の壺などが出土した。これら周溝墓群を調査中、明治大学の



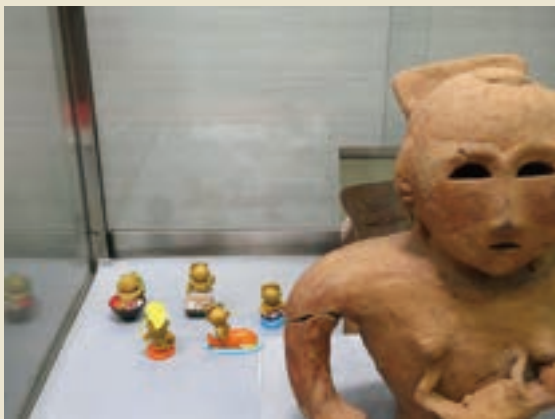
台宿二本松遺跡調査風景



台宿二本松遺跡調査参加者

生や野田市郷土博物館の下津谷達男館長が視察され、いろいろな調査例を教えていただき、後日大塚先生から方形周溝墓特集の『駿台史学』をお送りいただいた。この他周溝墓部分から旧石器時代の石器群も発見されている重要な遺跡のひとつであるが、報告書は発行されていない。我々調査参加者は、暑い中汗だらけになって懸命に発掘したが、当時水戸市では整理費などの予算獲得がなされていなかった。そのため、現在では出土遺物や図面・写真など調査の成果品は散逸状態になっているという。

当時巷では吉田拓郎の「旅の宿」や天地真理の「ひとりじゃないの」などの歌が流れていた。



「はははにわ」やっとそろいました

2025年11月28日



ひたちなか市の古墳を紹介する第四回目の展示では、「海を臨む石棺墓」と題して二〇二〇年に調査を行った入道古墳群を取り上げました。ただし、石棺墓の特徴として、ほとんど副葬品が出土しないことから、展示では国立科学博物館に依頼した人骨の調査成果を中心に紹介しました。

人骨からわかったこと

残存状況のよい人骨からは、さまざまなことを知ることができました。詳細については、『埋文だより』59・60号でお伝えしていますが、改めて表記すると、磯崎東古墳群（いそきひがし）を含めると年齢は、幼児・青年・壮年・熟年とさまざまです。性別は、男性三体、女性が四体で、ほぼ同じ比率になります。これは磯崎東古墳群でも同じで、年齢や性別による選択はなかったと考えられます。推定平均身長は男性で一五七cm、女性で一五〇cmと算定されました。第2020:2

号石棺墓、第2020:5号石棺墓、第2020:7号石棺墓は女性の単体埋葬であり、今回の調査では男性の単体埋葬がないことが判明しました。磯崎東古墳群でも第2011:1号石棺墓と第2016:1号石棺墓、第2016:6号石棺墓の単体埋葬すべてが女性で、両遺跡とも女性の単体埋葬が多いことが注目されます。

女性の単体埋葬について、横穴墓における女性の埋葬について検討を行った足立佳代氏の研究（足立2015）を参考にすると、「横穴墓に埋葬される際、性別による選択はなかったものと考えられる」とされ、東京都北区の赤羽台横穴墓群の事例を参考に「律令期における墓制にあって、女性が単独で埋葬されていた事実は、横穴墓造営集団における女性の地位が決して低いものではなく、まして、当時の社会が家父長制であったことを示すものでないことを強調しておきたい」と述べています。また、赤羽台横穴墓群の単体埋葬の女性について、「おそらく横穴墓の造営主体である集落において、軍事力ではない力・家政能力を備えた女性で、単純に「家長」の妻とはいえないであろう」としています。そして、まとめとして「古墳時代後期から律令期における社会は、男性優位とはいえず、女性も一定の地位を有していた集団もあるということ」、「また、その集団の性格や系統によっては、女性の地位が異なる可能性もあり、一様ではな」としています。

足立氏の分析は横穴墓を対象としています。が、斜面部の石棺墓に關しても、この考察が当てはまるものと考えます。出土遺物をほぼ伴わない斜面部の石棺墓ですが、入道古墳群で唯一刀子と鉄鏃を伴っている第2020:5号石棺墓の被葬者が女性であることも、足立氏の考察の裏付けになります。すこし飛躍した考えとなるかもしれませんが、当地の石棺墓に埋葬された女性が足立氏の指摘する「能力を備えた女性」とするならば、海との関わりの深い「海女」のリーダのような人物が想定できないかと考えています。人骨の調査では、他にも男性の人骨には、座つて舟を漕ぐような動作・作業を日常的に繰り返していたと思われる特徴も見つかっています。

海を臨む石棺墓については、この地が海と内水面とをつなぐ交通の要所となる場所であったことから、「海洋民」の存在を指摘し、その海洋民の墓が海岸部の墳墓ではないかと考えていますので、人骨からわかる成果は重要で、その裏付けとなるかもしれません。

（稲田健一）



展示のようす

*参考文献：足立佳代 2015 「東国の横穴墓における女性の埋葬について」『大学院年報』第32号 立正大学大学院文学研究科, pp.75-102

稲田健一 2024 「海を臨む石棺墓—茨城県ひたちなか海浜古墳群の一例—」『日本考古学の論点⑤』雄山閣, pp.123-130

文 埋 センターの 日々 2025 後期

10月

5 畠ノ原遺跡試掘調査終了／5
ふるさと考古学⑦「十五郎穴を測
る―地図の考古学―」(講師：三井
猛氏・梅田由子氏・さかいひろこ
氏)▶



／7-10 前山古墳群試掘調査／
ニワンケース・ミュージアム65
「ひたちなか市の古墳4―海を臨
む石棺墓―」開始／15-23 地藏根
遺跡試掘調査／21-28 内手遺跡試
掘調査／26 ふるさと考古学⑩「遺
跡でアート―」(講師：安芸早穂子
氏・わかづひろこ氏)／28 虎塚
古墳石室公開前点検／30 市毛コ
ミュニティセンター資料貸出(勝
田二中学区出土遺物等)／31『埋文だよ

リ『第63号刊行

11月

1-30 第6回 Kids考古学新聞コン
クール受賞作品巡回展▶



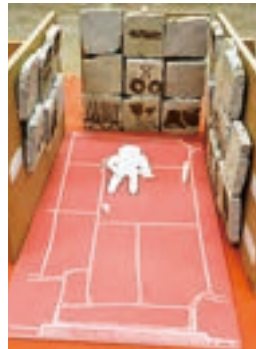
／5 市毛コミュニティセンター
「ふるさとのはにわと土器展」にて
市毛小学校6年生に展示解説▶



／6-9・13-16 虎塚古墳一般公開の
たちなかユネスコ協会案内ボランティア
／7 中根小学校1年生どんぐり拾
い(右下)／8 クラブツurisム団
体見学／9 市毛コミュニティセン
ター「ふるさとのはにわと土器展」
展示解説／11 市毛コミュニティ
センター資料返却(勝田二中学区出土



遺物等)／13 国際交流サービス・
ワールド航空サービス団体見学
／14 潮来市郷土史研究会・クラ
ブツurisム団体見学／15 クラ
ブツurisム団体見学／16 ふる
さと考古学⑨「壁画の考古学」(講
師：山田茉央氏・山田梨央氏・さ
かいひろこ氏)▶



・クラブツurisム団体見学／18
虎塚古墳石室公開後点検／19 は
まぎくカフェ講座「古墳時代前後
の那珂湊地区及び勝田地区の歴
史」／22 サイクリングDEひた
ちなか2025／28 茨城県立歴史
館資料返却「乳飲み児を抱く壺」／29 ふ
るさと考古学⑩「フィールド探検」



36 シヤガ

今回ご紹介する花は、虎塚古墳から十五郎穴横穴群への見学
路でよく見かける「シヤガ(射干)」です。漢字で「射干」と
しましたが、近似種のヒオウギのことを漢名で「射干」とする
のが本来であるとも言われています。別名で「胡蝶花」とも言
うそうです。シヤガはアヤメ科アヤメ属の多年草で、本州から
四国・九州に生育するとされています。元々は中国から日本に
入ってきた帰化植物です。背丈は五〇〜六〇cmで、葉は先がと
がった細長い剣形で濃い緑色をしています。花は紫色と黄色の
模様のアヤメに似たきれいな花です。花の咲く時期は四月〜五
月頃です。

シヤガは、春の虎塚古墳壁画一般公開と、その後に行う公開
後点検が終了した頃から見かける花です。なので、私には春の
公開が一段落して初夏の始まりを感じるお花です。(稲田健二)



2024.04.26

(講師：矢野徳也氏・さかいひろ
氏)

12月

2-9 田宮原 1 遺跡試掘調査 / 4 勝
田中等教育学校 一年生見学 / 7 茨
城県考古学協会理事会 / 14 ふる
さと考古学 ① 「遺跡はみんなのた
からもの」 (講師：鈴木康二氏・
さかいひろ氏) ↓



14 ワンケース・ミュージアム
65 「ひたちなか市の古墳 4 - 海を
臨む石棺墓」 終了 / 20 中根とき
わ会 虎塚古墳清掃作業

1月

1-1 さんち考古学 ② 「楽しい考古
学」 (講師：さかいひろ氏) (右)
/ 14-23 下高場遺跡試掘調査

2月

4-6 老人塚古墳群試掘調査 / 13-



第22回企画展「古代の砥石の産地
を探す」開始 / 15 ひたちなか市
の考古学第18回 ① 「古代の席(むし
ろ)・薦(こも)生産について」 (講
師：津野仁氏) / 18-23 ひたちな
か市民交流センター コミュニ
ティギャラリー 資料貸出・展示「虎
塚古墳遺物等」 ↓



22 ② 「岩石・鉱物と考古学」 講
師：矢野徳也氏 / 26 岡田遺跡
試掘調査開始

3月

1-③ 「万葉集と筑波山」 講師：井坂
敦美氏 / 8-④ 「ひたちなか市出
土砥石の産地を探る」 講師：佐々

木義則) / 2 我孫子市史研究セ
ンター見学 / 11-20 向坪遺跡試掘
調査 / 14 市中央図書館講座「虎塚
古墳、どう伝える？」 ↓



15 市青少年課主催射爆場跡地
観察会での説明 / 15 岡田遺跡試
掘調査終了 / 19-22・26-29 虎塚
古墳一般公開 / 28 クールジャパン
トラベル・クラブツーリズム見学
/ 29 クラブツーリズム見学 / 31
輪の輪工芸美術会見学・『埋文だ
より』第64号刊行

入館者状況 (2025.10.1. ~ 2026.3.31)

月	開館 日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
10月	27	234	2 (0)	37 (0)	271	
11月	26	1202	10 (0)	370 (0)	1572	
12月	23	173	3 (1)	88 (60)	261	
1月	23	177	1 (0)	18 (0)	195	
2月	24	209	2 (0)	102 (0)	311	
3月	26	1158	7 (0)	238 (0)	1396	
合計	149	3153	25 (1)	853 (60)	4006	

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたち
なか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『市報
ひたちなか』及び下記のホームページでお知らせします。
<https://hitachinaka-maibun.jp>

編集後記の
虎の子

今号では、二〇二五年五月四日に逝去された
川崎純徳先生の追悼として、鈴木素行氏に原稿
を執筆していただいた。そこに添えた虎塚古墳
を見つめる川崎先生の写真は、二〇一五年四月
九日にFM東京の「ホンダスマイルミッショ
ン」というラジオ番組で、「虎塚古墳を発掘し
た男性をリサーチせよ」という放送で取材を受
けているときに、私が撮影した写真である。虎
塚古墳の発掘調査から、その後の保存と公開に
携わった先生を物語るよいカットではないかと
思ってしまったものである。

川崎先生には、私が学生時代からお世話に
なっていたが、最もご指導を賜ったのは十五郎
穴横穴群の国指定史跡に向けて行った調査と報
告書作成の時であった。先生のご指摘やご指導
がなければ、史跡に指定される根拠となる報告
書の完成はできなかつたと思う。

先生のご存命中に十五郎穴横穴群の国指定史
跡は叶ったが、保
存と活用について
先生のご指導を賜
れないのがとても
残念でならない。
先生のご意志を継
いでがんばります
ので、天から見
守ってください。



2012.2.28 十五郎穴横穴群視察 (右から2番目が川崎先生)



ひたちなか埋文だより 第64号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2026年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市申根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 大富印刷株式会社

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターホームページ

